

アレキサンドリアからの手紙 ④

(E-JUST : Egypt-Japan University of Science and Technology)

大阪大学大学院工学研究科
電気電子情報工学専攻教授

河 崎 善一郎

6. E-JUST

アレキサンドリアからの手紙も今回で4回目ですから、そろそろ私がこの地にいる「本当の目的」を話さねばなりませんね。定年まで後1年以上も残しながら私が、「2年間の長期出張で、この地アレキサンドリアに何故、滞在しているのか。」という本当の理由をです。

本来ならこのシリーズの最初にお伝えしておくべきだったのでしょうが、1回目の原稿提出が、あのインターネット革命の最中でしたので、その状況の報告が先となり、その後ついつい失念致しておりました。遅ればせながら、そして新年のご挨拶がわりに、ちょっとした回顧録を兼ねてお話させていただきます。

そもそもの発端は、2008年の秋まで遡ることになります。10月の初旬であったでしょうか、前馬場研究科長の名代で、JICAの主催する「E-JUST 支援会議」とやらに出席しました。東京は西新宿でしたが、出席者は12支援大学の副学長、研究科長や事務局長といった錚々たるメンバーで、平教授の出席は私だけだったとの記憶があります。そして名代となって出席する様になった理由まで遡りますと、その年の春、豊田元研究科長との立ち話になります。豊田元研究科長が定年を控えた3月中頃、専攻長会議が終わって会議室を出ようとし、と、「河崎さんちょっと良いかな？実はエジプトに視察に行ってくる。新しい大学を作るんだ。君にも手伝って貰いたいんだ。帰国したら詳しく話すよ・・・。」と声を掛けられました。私は、極めて気楽に「ええ良いですよ。電気系の科目なら教えることぐらいできますから・・・。」と応えさせていただきました。ところが、2008年9月末のある日、馬場前研究科長から「河崎さん、東京出張して下さい。E-JUST 支援会議があつてねえ。なんでも豊田さんには河崎さんが手伝うと応えたと聞いているので。僕はその日北海道に出張なんだ。」と、まさに青天の霹靂「一体何のこ

とだろう？」と一瞬いぶかしくも思いましたが、私自身生まれながらの楽天主向「まあおいおい何のことか思い出そう！なんとかなるさ。」と、即座に考え直し出張を快諾したのです。

ところが出張して会議に出席してびっくり、何とその日 E-JUST 支援会議に併せて、日本とエジプトが共同して E-JUST を設立することの合意文書の調印式まであることが判り、おまけに12大学からの参加者は、先にも述べた様に錚々たるお歴々で、私は場違いな感じがしてお尻がむずがゆく思えた程でした。私自身、柄にもなく不安だったと言ったところでしょうか。

会議の開始までに少し時間があり、所在なくしておりますと、満面笑顔といった丸顔の紳士(?)が近づいてきて「大阪大学の河崎先生ですか。JICAの角田と言います。この漢字ですとスミダとも呼ばれたりしますが、私はツノダです。エジプト・アレキサンドリアで、『E-JUST (Egypt-Japan University of Science and Technology)』の設立に携わっています。先生のことは豊田先生からも伺っています。今日はご出席有難うございました。」と声をかけて下さいました。そして、E-JUST の理念や目指すべきゴールを手短かに話してくれたのです。

やがて会議が始まり、まあ例によって現状報告やら協議承認事項やらが続いたのですが、E-JUST の教育の在り方の議論となった時、ある大学の方が「大学が発足してすぐに良い教育ができるわけがないし、ましては博士課程の学生の指導など無理だろう。まあ当面優秀な博士課程学生には日本に来てもらって、教育することから協力を始めたら・・・。」といった内容の発言をなさいました。これはつい直前に角田さんが「アレキサンドリアに、世界でもトップレベルの大学を作りたいのです。エジプトはこの E-JUST に、日本型の大学院を期待しています。我が国はアフリカに目を向けない傾向にあります、あの大陸は21世紀には

きっと飛躍します。ですから日本型の高等教育機関 E-JUST を、アフリカ大陸へのゲートウェイにしたいのです。今のままでは、我が国は対アフリカ政策には、置いてけぼりを食らいます。先生、エジプトの仲間達と世界の大学を目指しましょう。」と、短時間でしが目をキラキラさせながら、彼の熱き思いを語って下さったことは、ある意味全く矛盾する発言で、私は思わず手をあげ「それは、日本型大学院教育で E-JUST を世界トップレベルにしよう。という計画とは全く矛盾します。失礼ながら先生のご発言は、まるで戦前の植民地主義で、私は反対です！」と発言してしまいました。今から考えると、何と青臭い発言だったろうかとも恥じ入る思いですが、あの瞬間は正直腹を立てていたものですから・・・確かに一瞬場がしらけましたが、私の発言の余韻もあまりないままに、議題は次に移って行きました。やがて予定の2時間余りが経過し、最後の案件が議論されました。議論というより、翌11月の最終週にアレキサンドリアで予定されている E-JUST 主催のシンポジウムの紹介があり、発表者を募っていることを知りました。そこで私は、そのシンポジウムに参加してみようと考え、会議の直前に声をかけて下さった角田さんに「私もアレキサンドリアのシンポジウムに参加させて頂けますか？」と尋ねましたところ、二つ返事でどうぞとのこと。私は当時取り組んでいた「まいど衛星」を題材に、私達の研究手段である野外観測を絡めて、研究の場で大学院学生を教育する On the job Training (OJT) や Program Based Learning (PBL) を E-JUST で実施してみたい、それが E-JUST の教育の在り方の1つであると主張してみようと考えました。

シンポジウムにおける発表では、研究内容よりも方法論に主眼を置いて判り易かったからでしょうか、私の講演がいわゆる大向こうを喰らすということになり、翌年3月には JICA 副理事長の上田さんと角田さんが大阪大学を訪問され、当時、国際協力担当副学長であった辻名誉教授に「河崎教授を E-JUST 電子通信計算機科学工学類アドバイザーとして、赴任させて欲しい。」と申し入れられたのです。

これは私にとってはちょっとした驚きで、辻副学長に提示された E-JUST の資料には、私の名前が既に

はっきりと印刷されていたのです。

何やら自惚れの内容となってしまう新年早々おめでたい話ですが、そんなわけで世界一はともかく、世界有数の大学 E-JUST を目指して、この地エジプト・アレキサンドリアにいたいというのが正直なところです。とはいえ、E-JUST は、大学院学生が入学を初めて未だ2年足らず、今春には初めて修士課程学生を世に送り出すといった具合で、大学としてはまだまだよちよち歩きの状態です。ですから私は、当初の出張予定2ヶ月を2年に、さらに4年に延長してもと、気持ちを引き締めている次第です。

いずれに致しましても、エジプトまたは近隣諸国へご出張の際は、是非アレキサンドリアに立ち寄って、お声をかけて下さい。ちなみに kawasaki.zen@ejust.edu.eg がメールアドレスです。ご参考までに、仮キャンパスの風景写真をお示しいたします。



2010年2月仮キャンパスで始まった E-JUST の風景

(通信 昭和48年卒 50年修士 53年博士)